

大平知佳様（日本医療マネジメント学会）

桜新町アーバンクリニック様（2013年10月11日 見学を終えて）

この度は、お忙しい中お時間を頂き、貴クリニックの在宅医療の様子を見学させて頂いて誠にありがとうございました。

おかげ様で、「診療所ではどのような医療が行われているか、地域医療においてどのような機能を果たしているかを理解する」という実習の目的に沿い、学びを得ることができました。

私が今回見学して最も印象に残ったのは、患者様やご家族が本当に訪問診療の医師と看護師を頼りにしているということです。「先生が来るから、これを聞こうと思っていたの」とメモを取り出され、不安なことや尋ねたいことなどをお話される患者様・ご家族を多く拝見しました。そのようにお話できるということは、日頃からの信頼関係がしっかり構築されているからであると強く感じました。

在宅で暮らし続けるには、医療面・介護面・精神面で支えてくれる人が必要ですが、在宅での医療といってもただ医療行為や看護行為のみを指すのではなく、日頃からの信頼関係を構築できるコミュニケーション力、患者様の状態が不安定な時にご家族からコールが入った際に、安心・納得して頂ける対応力なども求められることと思います。「メガネ新しくしました？」「お庭のあのお花、何ていう名前ですか？」などと雑談を交えながら自然な会話で患者やご家族をリラックスさせ、しっかりとコミュニケーションが取れていたことは「介護」に携わる者としては当たり前に思っていたのですが、在宅での「医療」でも当然として行われていて本当に印象的でした。

また、多くの関係機関が関わり合いながら、なかなか顔の合わせる機会のない在宅では、情報共有が大きなテーマであると聞いておりましたが、こちらではiPhoneの活用により、情報共有の促進に取り組んでいらっしゃることも勉強になりました。それでもなおFAXでのやり取りが多いとのこと。メディアリテラシーや所有する機器の違いなどもあり、なかなか統一の方法を進めていくことは難しいかと思いますが、将来的には情報共有と業務効率化の仕組みとして地域に浸透すればと思います。

私も介護（施設）に関わる者として、「誰もが住み慣れた地域で暮らし続ける」ことをサポートできるよう、取り組んで参りたいと思います。機会がありましたら、認知症の初期対応チームや院長先生などの訪問診療など、またぜひ見学させて頂ければ幸いです。大変勉強になりました。本当にありがとうございました。

大平 知佳